

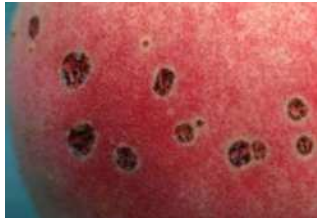
(3) モ モ

主要病虫害別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病虫害の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病虫害名 (病原体)	農薬によらない防除
せん孔細菌病(細菌)	①春型枝病斑は見つけしだい除去する。 ②風当たりを弱くするために、防風垣や防風ネットを設置する。 ③袋かけを行う品種の場合、果実感染を軽減するために、早期の被袋を行う。 【参考事項】 病原細菌は新梢の皮部組織内で越冬し、4月になると病斑を形成する。ここで増殖した細菌が雨滴に混じって分散し、葉や果実の気孔や傷口から侵入する。   写真1：葉の病斑 写真2：果実の病斑
縮葉病 (<i>Taphrina</i>)	①病葉を摘み取り 園外で処分する。 【参考事項】 被害葉に形成された子のう胞子が飛散して枝や芽の附近に付着し、新しい分生子を作り越冬する。発病適温は 13～17℃である。  写真1：葉の病徴
黒星病 (<i>Cladosporium</i>)	①5月下旬までに袋かけを終了する。 ②病果や病枝を切り取り、処分する。 【参考事項】 枝上の病斑組織内で菌糸の形で越冬する。発病適温は 18～23℃である。感染してから発病するまで 30 日程度である。
炭疽病 (<i>Colletotrichum</i>)	①病枝を切り取る。 ②摘果、袋かけ時に病果を摘除する。 【参考事項】 病果や病葉を生じた枝が伝染源である。越冬後、4月中旬頃から罹病枝に分生子を作り、降雨で伝染する。
ホモブシス腐敗病 (<i>Phomopsis</i>)	①枯れ枝を除去する。被害果の早期発見と早期除去に努める。 ②密植を避けて通風、採光を図る。 【参考事項】 枝に寄生又は腐生して越冬し、春になると柄胞子を形成する。発病適温は 25～30℃である。
灰星病 (<i>Monilinia</i>)	①袋かけをする。 ②花腐れや被害果は早期に発見し、適切に処分する。 ③病枝を切り取る。 ④ほ場内の排水、風通し、日当たりなどが悪いと発病を助長するので、排水を良好にし、密植を避け、徒長枝の適切な管理を行う。 【参考事項】 病原菌は被害果や被害枝で越冬する。発病適温は 20～25℃である。   写真1：花腐れ症状 写真2：発病果（成熟果）
アブラムシ類	【参考事項】 冬寄主の芽の周囲、その附近の小枝で卵で越冬する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
カイガラムシ類	①越冬期に枝幹に寄生しているカイガラをたわしや竹ヘラで削り落とす。 【参考事項】 雌成虫で越冬する。幼虫発生期は5月上旬～6月上旬、7月中旬～下旬、8月下旬～9月下旬の3回である。
ナシヒメシシクイ	①袋かけをする。 ②食入初期の新梢を切り取って内部の虫を殺す。 ③越冬虫を取り除くために、冬期に粗皮削りをする。 ④秋期には枝幹部にバンド巻きを行い、越冬虫を誘引し2月頃に取り外して適切に処分する。 【参考事項】 老齢幼虫で粗皮下などの隙間に繭を作って越冬する。
モモノゴマダラノメイガ	①袋かけをする。 ②冬期に粗皮削りをする。 【参考事項】 老齢幼虫で粗皮下などの隙間に繭を作って越冬する。
コスカシバ	①4月頃、虫ふんを目あてに樹皮を削って中の幼虫を殺す。 ②秋期に虫ふんの出ている樹皮を小槌でたたき、若齢幼虫を圧殺する。 【参考事項】 幼虫で枝幹の加害部で越冬する。成虫は年1回の発生で、5～10月まで長期間発生し、5月と9月が発生ピークとなる。
モモハモグリガ	①落葉した葉にも繭を作っているため、羽化する前に集めて処分する。 【参考事項】 樹幹の間隙や建物の間隙などで成虫で越冬する。年6～7回発生する。
ハダニ類	①発生源になりやすい下草雑草をこまめに刈る。 ②バンド誘殺する。